
バカとテストと人格形成

ぬぬぬぬぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと人格形成

【Nコード】

N8562Y

【作者名】

ぬぬぬぬ

【あらすじ】

造られた人格であるがために感情が薄い少年、三好漣。彼はFクラスの人たちと過ごしていくうちにどんな人格になっていくのか？
思いつきで投稿してみました。駄文ですが興味があったらどうぞ。

もと生きていた人のものじゃし、ワシがやったのはお主の魂・・・
とでも言おうかの？自我の定着、そして膨大な量の基本知識の植え
付けぐらいじゃ」

「・・・自分は？」

「そうじゃのう、人造人間1号・・・と名付けたいところじゃが、
やはり人間的な名前の方がよからう。お主の名前は・・・」

オリキャラプロフィール

三好 みよし

漣 れん

性別

男

身長 159?

体重 43?

科学者、高山繁治の手によって造り出された少年。いわゆる人造人間であるが、体は本物の人間の死体に魂のようなモノを吹き込んだだけなので、造られたのは人格と知識のみ。そのため食事などもらなければならず、食べ物の好みなどはもともとの体の持ち主と同じく設定されている。脳内に蓄積されているデータはかなりの量で、幅広い分野であらゆる知識を備えているものの、やはり生身のため彼がこれから覚えていく知識などは普通の人と同じように記憶される。造られた人格であるためか感情が薄く、見かねた繁治が人間性を持たせたいがために文月学園に入学させることになる。

高山 たかやま

繁治 しげはる

性別

男

身長 164?

体重

58?

漣という自我を造った科学者。藤堂カヲルとは科学者としての知り合いであり、そのつてを使って漣を文月に入学させる。感情の薄い漣を心配しており、彼を見守りながら趣味である研究日々打ち込

ん
で
い
る。

オリキャラプロフィール（後書き）

設定めんどくさくてすみません・・・。

要するに体は人間、心は機械、て感じですよ。

プロローグ2

「1号・・・あ、間違った漣よ・・・」

「なんですか、博士？あと私を1号と呼ぶのはやめて欲しいのですが」

ある部屋で一人の老人と少年が話をしている。少年は表情ひとつ変えずに話しており、しゃべり方にはどこか機械的な印象が含まれている。

「むう・・・やはりお主は感情が乏しいのう・・・怒ったり笑ったり悲しんだりはせんのか？」

「私には理解できかねます。それに私を造ったのは博士ではないですか。博士がわからないことを私がわかるとは思えません」

「むう・・・やはりなあ・・・お主を造ってこの3年間、ニコリとしたこともないからのう。・・・よし、決めたぞ。お主には一度人間たちの中に混じって過ごしてもらおう。そこで人間らしさや感情が付加されていくか試してみるのじゃ。なに、もともとは人間じゃ、そう難しくはあるまいて」

「私は博士が命ずるなら何処へでも行きますが・・・」

「ならば行ってくれ。お主の見た目に合わせて場所は高校にしておくかのう。ちょうどあのババアが学園長をやっておる高校があるぞうじゃ。そこにしよう」

「畏まりました」

そう言って少年は博士と呼ばれる老人に頭を下げた。その目には期待の色も不安の色も見えず、ただただ物事をこなす無機質な目。

「・・・ふむ・・・」

その目を見て繁治は、3年間漏らしてきたため息をまた漏らした。

第一問

「（ここが試験召喚システムを採用しているという文月学園ですか・
・・）」

漣は文月学園の廊下を歩いてきた。今日から文月学園の生徒として
過ごすことになっていて、まず学園長に挨拶に来たのである。
コンコン

「入りな」

「失礼します」

ガチャ

きちんとノックをしてから漣は学園長室に入る。

「フン、あんたが三好かい？あのジジイが造った自我にしては礼儀
がなってるじゃないか」

学園長は礼儀正しい生徒は珍しいようで感心したように鼻をならす。

「今日から文月学園の二年生として入学させていただく、三好漣で
す。これからよろしくお願いします」

「これまた丁寧な挨拶だねえ。あのジジイはこんな言葉なんて言っ
たことすらないだろうに・・・さて、あんたのクラスだが、机な
んかの設備がすぐ準備できる物がないから、準備が容易なFクラス
に決まったよ」

「そうですか」

「あんたも災難だねえ、あんなクラスに入ることになるなんて・・・

恨むなら新学期からきつちり入れさせなかつたあのジジイを恨むんだね」

「別に自分はどのクラスでも構いません。博士の命令ですので」

漣は相変わらずの無機質な口調で話す。

「やれやれ・・・そんな感情のない話し方はやめてほしいね。あのジジイもそれが原因であんたを文月に入れたんだろうに」

「博士といえば、博士から学園長に伝言を預かってきました」

「何だい？」

学園長が漣の話し方を注意すると、漣は博士から伝言を預かってきたと言う。

「『死ね、クソ妖怪ババア』だそうです」

「フン、『死ね、クソジジイ』とでも返しといてくれ。さあさあ、用が終わったらとっとと自分のクラスに行きな。アタシは忙しいんだよ」

「わかりました。・・・それと」

漣はドアの前まで歩き、学園長に言いたいことがあったようで振り返る。

「学園長の容姿に対しては自分も博士と同意見です」

ボタン

漣は去り際に毒を吐いて出ていった。

「・・・チツ、やっぱりあのジジイが造った人格だねえ。・・・」

しかしまさかあの子の体を使うとはね・・・一から体を作ることで
つてできたろうに・・・」

学園長は漣の体に見覚えがあるようで、その場にいない博士にむか
って文句を洩らす。

「さて、あなたの造った人間がどんなふうにあのバカクラスで過ご
すのか、見せて貰おうじゃないか」

第二話

『さて、今日は皆さんにお知らせがあります。今日から一人転入生がこのクラスに来ます。皆さん仲良くしてあげて下さい』

「（別に仲良くしてくれなくてもいいんですがね・・・）」

場所は二年Fクラス。福原先生が転入生の前置きをし、漣は廊下で呼び出しがかかるのを待っている。

『転入生は当然女なんだろうな！？』

『見た奴はみんな可愛い子だと言っていたぞ！』

『ここから俺とあの子のラブストーリーが・・・ぐふふ』

中には漣の姿をもう見かけた生徒もいるらしく、女の子の生徒が増えると思いはしゃぐ生徒や、勝手な妄想をしてよだれを垂らす者など反応は様々である。

「（設備だけでなく生徒も最低なクラスなんですね・・・まあ別にかかわらずに過ごして行けばいいでしょう）」

「それでは三好君、入って自己紹介をしてください」

「はい」

ガララ

「どうも、これから皆さんと一緒にFクラスで過ごす三好漣です。三好でも漣でも好きに呼んで下さい。あと変な噂が立ってるみたいですが、自分は男ですのでどうか変な妄想などは控えていただきだと思います」

『誰だ女の子って言った奴は！』

『でもよく見れば女の子っぽくも見えないか!?』

『まさか奴も第三の性別・・・いや、第四の性別、三好だとも言うのか!?』

「(このクラスに常識というものは当てはまらないようですね・・・)」

全員の前で男と宣言した漣であるが、Fクラスには無駄だったようで漣はFクラスの評価を設定する。

「では、三好君はあその席で・・・」

『先生!君ではなく『さん』で呼んでくださいよ!三好さんが可哀想で』

「わかりました。そして重ねて言いますが自分は男ですので」

漣は無駄とは思いつつも自分は男であると訂正しながら、教室の後ろの方に歩き指定された卓袱台に座る。

「(まともな机も無いんですね・・・)」

「あ・・・ちよつと?」

「はい、なんでしょうか?」

隣に座っている男子生徒が漣に話しかける。

「僕は吉井明久。これからよろしくね!趣味はゲームで、後は「学年を代表するバカだ」ちよつと雄二!なんで僕が観察処分者なことをばら・・・って自分ではらしたあぁー!」

「よう、俺はクラス代表の坂本雄二だ。これからよろしくな」

「よろしくお願ひします。坂本君と・・・学年を代表するバカさんですね?」

「名前よりそつちを覚えちゃうの!?!絶対わざとだよね!?!」

明久は漣に自己紹介をするが、名前より先にバカなことを覚えられてしまい落ち込む。

「はいはい、その人たち、静かにしてくださいね」

バキィツ、バラバラバラ

「……………ここは本当に教育機関ですか？」

「はは……たしかに酷い設備だね……」

「博士は私をこんなところにいれてどうしようとしているんだか……」

「ん？何か言った？」

「いえ」

「えー、ちょっと代えを持ってくるので、自習しててください。転入生と話して仲良くなるのもいいですよ」

ガララ、バタン

「ふむ、まあそういうことじゃし、ワシも転入生と親交を深めることとしようかのう。木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。後

」

『『『美少女どうしの絡み！眼福じゃーっ！』『』』

「後ワシは男だから間違えないようにしてほしいのじゃ……」

「木下君ですね？よろしくお願いします」

「うむ、これからよろしくなのじゃ。お主とは共感できるといえるが
ありそうじゃしのう……」

同じような境遇の仲間ができ、喜ぶ秀吉。

「あ、それじゃあウチも！島田美波です！趣味は・・・吉井を殴る
ことです」

「吉井君、この子はすぐに少年院に入れるのが適切な処理だと思います」

「ちょっと！それどういう意味よ！」

「そういう意味です・・・あなたは？」

美波を施設に入れた方がいいと言うと、美波は漣に掴みかかろうとするが漣はかわして美波の後ろにいる女子生徒に目を向ける。

「あつ！ひ、姫路瑞希です。趣味は料理を明久君に食べて貰うことです」

「そうですか、今の人よりはまともな趣味を・・・吉井君？顔色が悪いですよ？」

「い、いや・・・そんなことないよ・・・」

「・・・不味いんですかね？・・・そしてさつきから私を撮っているのは誰ですか？」

明久の青ざめた顔を見たが姫路の料理の異常には気づかない漣。同時に自分に向かってシャツターを切っている少年を見つけたように声をかけた。

「・・・土屋康太。後そんな事実は確認されていない」

「ああ、あれはムツツリーニだよ」

「ムツツリーニ？要するにムツツリスケベということですか？」

「・・・（ブンブン）！」

「肯定してますね・・・ある意味」

「おい、三好」

「なんですか？坂本君」

漣がムツツリー二のムツツリさを目の当たりにしていると、雄二は漣に話があるようで声をかける。

「お前、勉強はどうだ？」

「できるか、ということですか？別に得意とも苦手ともいいませんがまああなたたちと比べれば格段にできると思いますよ」

「それは本当か？なら好都合だ。お前に試召戦争と今の状況について説明したい。まずお前は試召戦争については知ってるか？」

「はい、そのデータは博士が入力済みです。試験も昨日全て受けたので点数もあります」

「博……？まあいい、それなら話は早いな。それなら今のFクラスの状況から言おう。廊下に来てくれ」

雄二とともに教室を出て行く漣。そして残されたメンバーは転入生の感想を口々に言い合う。

「ふむ……なんというか、淡泊な印象を受けるのう」

「うん……なんか何も考えてないような顔だったよね……」

「いつも何も考えてないのは明久ではないのかの？」

「秀吉なんて嫌いだっ！」

「成る程、つまり散々汚い手を使ってDクラスとBクラスに勝ち、またまた汚い手を使ってAクラスと一騎討ちに持ち込もうとしている。そういうことでいいんですね？」

「……まあ言い方は悪いがそんな感じだ」

「ですがなぜ私に説明したんですか？一騎討ちなら別に私は知らなくても関係ないじゃないですか」

「いや、一騎討ちに持ち込むつもりだが、Aクラスの交渉側によってはそうならない可能性はある。いや、そっちの可能性の方が高い」

「成る程。それで？」

「恐らくAクラスは3対3から対5あたりを提案するはずだ。その提案を逆手にとり科目の選択権を手に入れる。だからお前に何か得意教科でもあればと思ってな」

「これといって得意科目はありませんね。まあ強いて言えば暗記科目ですが……あ、これが点数の表です。見ますか？」

「おう、貸してくれ」

ペラ

「……これは……！」

「どうですか？やはり暗記科目の方が点数がいいですかね？自分は『忘れる』なんてことはありませんからね。あくまでも『最初』に記録されたもの限定ですが」

「お前……何者だ？」

「それを話すことは禁止されておりますので。では自分は教室に戻ります」

スタスタスタ

「・・・・・・・・・・」

漣の後ろ姿を見つめる雄二の顔には、疑問と困惑がありありと浮かんでいた。そしてもう一度手に持った紙の、一番上に書いてある教科に目を通す。

『三好 漣 日本史 684点』

「博士、ただ今帰りました」

「おお、漣よ。お帰りなのじゃ。どうじゃった？」

「文月学園ですか？そうですね・・・自分のクラスは特異な方が多いです。平穏な日常は望めなさそうですね・・・」

「そうか、変わった奴が多いようじゃのう・・・。漣よ、そやつらのバカ騒ぎにも、なるべく関わるようにしてはくれんか？」

「別に構いませんが・・・なぜです？」

「中身の濃い生活をした方が、お主も色んな気持ちを抱くと思うてな」

「そうですね・・・あまり興味は感じませんでした」

「まあそれは一緒に過ごしてみんとわからんことじゃ」

ゆっくりで良い・・・それが漣を見詰める繁治の気持ちだった。

第三話（前書き）

ちなみに漣の一人称は『自分』です。わかりにくくなることからこれからあるかもしれないませんが、善処していきたいです。

第三話

「あ、漣？そろそろAクラス戦の時間だよ」

漣が転入した日の翌日、いよいよAクラス戦が始まるうとしている時である。Fクラスの生徒である明久が、隣の生徒に向かって声をかける。

「もうそんな時間でしたか。それでは行きましょう」

漣は冷静に時計を見、立ち上がって明久に近づく。

「Aクラスに」

「さて、両者とも準備はよろしいですか？」

場所は変わってAクラス。Aクラス担任である高橋女史がA、F両クラスに声をかける。どちらも準備は出来ているようで、教室には

ピンとした空気が漂っていた。

「それでは一人目の方、前に出てきて下さい」

「じゃあアタシが行くわ」

高橋先生の呼びかけに応じてAクラスから出てきたのは、秀吉の双子の姉である木下優子。

「Fクラスからは誰が出るのですか？」

「三好、ここは任せた」

「え？漣をもう出しちゃうの？まだとっておいたほうが良いんじゃないかな？」

「いや、明久。せつかくの初戦だ。勝って勢いをつけるのも悪くない」

「そういうことなら行ってきます。勝てばいいんでしょう？」

「ああ、頼んだ」

雄二は初戦で漣を指名し、漣はそれを聞いて淡々と前に出ていく。

「Fクラスからは自分が出ます」

「あれ？見たこと無い人ね？」

「ええ、昨日Fクラスに転入してきました。三好漣です。よろしくお願いします」

「転入生？」

「はい。木下君のお姉さんの、木下優子さんですね？よろしくお願
いします」

「こ、こちらこそ・・・」

『・・・転入生？』

『あらら、優子も大変だね？』

『点数はどうなんでしょうか・・・』

優子は突然の転入生に驚き、Aクラスの生徒たちからも不安の音が挙がる。

「教科はどうしますか？」

「そうですね、一応世界史でお願いします」

「それでは、始めてください」

「世界史？アタシの得意科目じゃない。試験サモン召喚！」

優子は世界史が得意なようで、自信に満ちた顔で召喚獣を呼ぶ。

『木下優子 Aクラス 世界史 374点』

「ちよつと雄二！木下さん、世界史が得意なみたいだよ！？」

「落ちて着け明久。三好なら大丈夫だ」

「へ？」

「流石Aクラス、といったところでしょうかね？ですが・・・試験召喚サモン」

『三好連 Fクラス 世界史 663点』

「自分の点数には及びませんね」

『ろ、600点台！？』

『学年主席を軽く超えるぞ・・・』

『Fクラスにこんな化け物が！？』

「せ、先生！？何かの間違いじゃ！？」

漣の点数が表示されるとともにどよめきの声があがり、優子は高橋先生にテストのミスではないかと詰め寄る。

「そんなことはありませんよ。採点したのは私です」

「そ、そんな!?!」

「雄二……漣って何者なの……?」

「さあな……」

「装備は二振りの鎌ですか……それにしても、大きい鎌ですね」

漣の召喚獣は柄が背丈の2倍ほどもある鎌を二本構えており、漣は驚いたのか嬉しいのかどっちともつかない声を出している。

「ちよつと!こんなのかなうワケが……!」

「まあ攻撃範囲が広くていいのかもしれない。行きますよ」

優子がうるたえている間に漣は武器の特性を理解し、漣の召喚獣が優子の召喚獣に襲いかかる。

「わっ!危ない!」

優子は間一髪で漣の攻撃を避け、ランスを構える。

「やっぱり操作は難しいですね……かすっただけですか」

『木下優子 世界史 147点』

「……へ?」

優子の点数を見て、全員があっけにとられる。

「かすっただけ?……そんな……」

「かすっただけであれだなんて……やっぱり点数のせいなのかな?」

「だろうな……だが予想以上だ」
「では、これでとどめですね」

呆然としている優子の目の前で、漣の召喚獣が鎌を振りかざす。誰もが漣の勝利を確信したその時、

「そこまでだよ！試合を止めな！」

しゃがれた声が教室中に響き渡った。みんなが視線をむけたその先には……、

「やれやれ、説明するのを忘れていたよ……」

文月妖か……文月学園長が頭を抱えて立っていた。

第四話

「おい、ババア。試合を止めろ、とはどういうことだ？」

「そうですね！今完全に漣が勝ってたところなのに！」

突然現れた学園長の言葉に、雄二は顔をしかめ明久は大きな声を出して学園長に詰め寄る。

「どうもこうも、全てはそのガキが理由さね。まあ説明し忘れてたアタシが悪いんだけどねえ」

「え？漣が？」

「アタシも説明してやりたいのは山々なんだけど、これはアタシ一人で説明していいことじゃないからね。この戦争の後にしな。・・・とにかくこの対戦は無効さね」

「そんな、いきなり・・・」

学園長は事情は後で説明するから試合は無効にするといい、明久を含めFクラスの生徒には明らかに不満の色が表れる。

「チツ、ならしょうがねえな。だが後でしっかり説明してもらおうぜ？」

「え？雄二、それでいいの？」

「ああ、元々三好抜きでAクラスに勝つ予定だったんだ。それにここで士気を落とすのも面白くないしな」

と、雄二。漣のことに疑問はあったが、それでも勝算はあると聞き直る。

「すみませんね坂本君。薄々こうなるとは思っていたんですが」

「いや、そんな全然残念そうじゃない顔で言われてもな……」
しかし漣はいたって冷静であり、その表情には悔しそうな感じもすまなそうな感じもない。あくまでも建前である。

「それでは、誰かFクラスから代わりの人を出してください」

「いや、高橋先生。これは俺たちの不戦敗でかまわない」

「本当によろしいのですか？」

「ああ。どうせ点数を消費した世界史は選ばせてはくれないんだろ？それなら一騎討ちじゃなくなっちまうからな。それに今のウチのクラスに木下姉と渡り合える奴なんていないしな」

高橋先生が代理を出すように言うと、雄二は皮肉的な笑みを浮かべて辞退しこの勝負はAクラスの勝ちとなる。

「わかりました。ではこれでAクラスの一勝、と。次の人は前に出てきてください」

「ヤッホー、優子。お疲れ」

「ありがと愛子。でも何が何なんだか良くわからない勝負だったわ……」

「うーん、あの転校生君、中々やるねえ」

「でもなんか……感情の無さそうな変な人だったわよ？」

「そうカナ？ボクにはただのポーカーフェイスにしか見えないけどなあ。あ、次は美穂じゃないの？頑張つてね」

「坂本君、本当に大丈夫ですか？」

「心配ないぞ三好、こっから十分挽回できる。」

ということだ

久、次はお前だ。頼んだぞ」

「そうですね、三戦目からが本番ですよね」

「漣なんか嫌いだっ！」

「三対二でAクラスの勝利です」

二勝二敗で迎えた大将戦が終結。雄二はAクラス代表、霧島翔子の目の前で真っ白になり膝から崩れ落ちていた。

「殺せ……」

「いい度胸だ雄二！歯を食いしばれ！」

「やめなさいアキ！あんたなら三十点もとれないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「坂本君……」

「すまん三好・・・あんな大口叩いて」

「坂本君もFクラスの例に漏れずバカなんですな・・・」

「ぐああああ！その冷静な目はやめてくれ！」

漣は雄二に蔑みの目線を送り、雄二は耐えられずにもがき転げ回る。

「・・・雄二、約束」

「・・・好きにしろ、と言いたところだが、ここはもう少し待ってくれ」

「・・・雄二、往生際が悪い」

「そういうことじゃねえ！」

今度は霧島が雄二に約束を迫るも雄二は少し待つように言い、霧島は雄二を逃がさないようにジリジリと近づく。

「さっきの三好のことだ！今更言いたくないが、アレのせいで勝敗が分けられたようなもんだからな」

「・・・確かにあれがFクラスの勝ちだったら危なかった」

「そうだ、それは学園長が説明するはずじゃ」

「心配するんじゃないよガキども、今から説明してやるさ。そうだね・・・今の試召戦争に参加したFクラスのガキどもは学園長室に来な。あといるかは知らないが、この二日で三好と仲良くなった者がいたらそいつも来るといい。それと三好、アンタも一緒に来て、三好はどこだい？」

学園長は漣も呼ぼうと辺りを見回すが、漣の姿はない。

「あれ？漣？いなくなっちゃった・・・」

「ふん、まああのガキ抜きでもいいさね。とりあえず、説明を聞く奴は学園長室に来な」

「Fクラスに限らず、一番優秀なクラスでも変な人はいるんですね・・・」

漣は一人ため息をつきながら呟く。この学校は本当に変・・・それが漣の二日間過ごしての感想だった。

「(さて・・・トイレに行って帰ってきたのはいいんですが・・・これは迷った、ということなんでしょうか?)」
「ヤッホー、転入生君」
「・・・?」

漣が辺りを見回しながら廊下を歩いていると、不意に後ろから声をかけられ、漣はゆっくりと後ろを振り向く。

「ああ、さっきの・・・工藤さん、でしたか?」

「うん。覚えててくれて嬉しいな」

「初対面で保健体育の実技のお誘いをしてくる人なんてそうそういませんからね」

名前を覚えられて嬉しいという愛子に、漣は試召戦争の途中で起こった出来事を持ち出して覚えた理由を説明する。

「アハハ、確かにそうかもね。でもボクがお誘いをした後の君の【検閲削除】って台詞にも驚かされたよ？」

「自分はそっちの知識も万全です」

「ムツツリー二君なんて危うくあれで死にそうになってたんだから、もう少し羞恥心つてものを持った方がいいんじゃないかな？」

「その言葉は貴女にそのままお返ししますよ」

数分前のやり取りを思い出しながら、いつのまにか二人で並んで歩き、気づけば学園長室の近くまで来ていた。

『バ……ちや……説……』

『わか……三好の……るさ……』

「ん？これはFクラス代表君と学園長の声かな？」

「その通りですよ……っと」

「ちよつと漣君？盗み聞きは不味いんじゃない？」

学園長室から聞こえてきた話声に、漣はドアを少し開けて盗聴の姿勢に入る。しかし別段興味があるようでもなく、その姿は内容がわかっていない話を確認するような姿に愛子には見えた。

「別に不味くありませんよ。自分に関する事なんですから」

「漣君のコトなの？何か面白い話？」

「興味があるなら聞いてもかまいませんよ。知りたいですか？自分の
の 三好漣の正体を」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8562y/>

バカとテストと人格形成

2011年12月17日11時55分発行